

日本イェナプラン教育協会



ニュースレター Vol.13 2012. 1月号

発行元: 日本イェナプラン教育協会

編集: 田村 悠子

住所: 〒155-0033

東京都世田谷区代田6-3-22-202

TEL: 070-5559-0361 FAX: 03-3466-3439

HP: <http://www.japanjenaplan.org/>

mail: Info@japanjenaplan.org

2012年、新しい年がスタートしました。今年もどうぞよろしくお願ひ致します。昨年は東日本大震災や原発事故が起こり、多くの人々が既存の価値観や自分自身を見つめ直した年でもありました。復興元年と呼ばれる今年、教育の面でもさらに良いものを目指し、新たな一歩を踏み出していきたいです。
編集(田村)

第12回

グローバル時代の日本の未来へのビジョンとイェナプラン教育

(2011年11月20日行った日本イェナプラン教育協会第1周年記念講演会の基調講演の内容に沿って書き起こしたもの)

※1周年記念講演会とワークショップについては本ニュースレター9ページにご報告させて頂いております。

協会代表 リヒテルズ直子

震災と原発事故が意味しているもの

日本イェナプラン教育協会が設立されたのは2010年10月11日、今から1年2か月ほど前のこととなります。当時の日本で、そのわずか5か月後に起きた東日本大震災のカタストロフィーを予測していた人はほとんどいなかったに違いありません。今から思うと、大震災の起こる前の日本が、遠い夢の彼方のことかのように、その後の日本社会には、人々の意識を根底から覆してしまう変化が起きました。

大震災と福島第1原発の重大事故によって、日本では今も被災された多くの方々が未来への不安を抱えながら生活しています。国の復興への取り組みは遅れ、この方たちのいら立ちと不安は想像を絶します。同時に、いつの間にか、地震列島に54基もの原発があったことを知らされた全国の住民は、これから放射能漏れの危機と隣り合わせで生きるという不安を余儀なくされることとなりました。自然の力を利用した代替エネルギー開発にせよ、被災地の早い復興にせよ、この20年余り悪化の一途をたどってきた日本経済、ましてや、世界の先進諸国の経済が行き詰まる中、悲観論が先立たざるを得ないのも悲しいことです。

さらに、私たち、イェナプラン教育を推進するものばかりでなく、この数年、日本の教育制度の抜本的な改革を目指して運動してきた人たち全てにとって、この状況は、教育改革の可能性の後退、国庫補助の期待の後退を予測させる厳しいものでもあります。政治の行き詰まりばかりでなく、政・官・企業、そしてマスメディアなど、少数のエリートたちの利害に基づく癒着の問題など、古い政治体制の問題が人々の目に明らかとなり、政治に対する不信と失望感は増大し、社会参加への意欲はますます低下しているかにも見えます。

しかし他方、そんな中で、草の根レベルでは、社会変革と教育変革を目指して、自分たちが動かなくては誰にも社会を変えることはできないという意識が、急速にそして、着実に広がっていることも事実です。それは、特に、これからこの日本で長く生きていかななくてはならない若者たちの間に顕著で、彼らのまなざしが明らかに真剣なものになっていることを、私自身日本各地でひしひしと感じています。

2011年夏、アメリカ合衆国ニューヨークのウォール街で、金融機をはじめとする大企業の貪欲と傲慢に業を煮やした若者たちが占拠運動を起しました。この運動の理念的バックボーンの一部を担った、環境保護運動家で経済学者のデービッド・コーテンはこんなことを言っています。

貪欲と支配権力による古い経済は瀕死の状態だ。生命とパートナーシップを求める新しい経済が、苦闘の中から産声を上げようとしている。どういふ結果を生み出すかのカギは私たちが握っている。最も重要な形式の豊かさには、値段がつけられないし市場では買えない。それは、健康で幸せな子どもたち、慈しみ合う家族、思いやりのある地域社会、美しく健全な自然環境などだ。

そしてコーテンは、古い経済のしくみは、「うぬぼれ、貪欲、嫉妬、激怒、強欲、大食、怠惰」を原理としていたが、未来を開く新時代の経済は「謙虚、共有、愛、共感、自制、節度、情熱」を原理としたものとなるはずだ、と言っています。

産業化時代の学校(ピーター・センゲほか「学習する学校」より)

ところで、アメリカ、マサチューセッツ工科大学の組織工学の権威者ピーター・センゲは、2000年に出された「学習する学校」という本の中で、以下のように述べています。

私たちは皆、自分が生きている時代の産物だ。そしてその時代を再生産するようなやり方で行動している。古いこんなジョークがある、「魚たちが何について話をしているのかを知るのには難しい。でも彼らが水について話しているのではないことだけは確かだ」と。「先進的な」社会に生きている私たちにとって、この産業化時代が私たちの世界観に与えている影響がどんなに大きなものか、ということを実際以上に認めている人は多分ほとんどいないだろう。この、私たちにとっての「水」、つまり文化の中にすっかり埋め込まれてしまったものごとの理解の仕方、取り扱い方などに、私たちはあまりにも慣れ切っただけで、私たちが、この産業化時代の一つの制度、つまり、私たちが「学校」と呼んでいるものを、根底から考え直し、もう一度新しい形で作りなおしてみようと試みる時に、このことがとても厄介な障害となるのだ。

センゲは、この本の中で、産業化時代の学習の仕方、学校のあり方の特徴として、次のようなものを上げています。

産業化時代の学校における「学習」とは、、、

1. 子どもは欠陥品で学校がそれを修正する
2. 学習は頭で行うもので体全体でやるものではない
3. 誰もが同じ方法で学ばなくてはならない
4. 学習は教室の中で行われるもので世界の中で行われるものではない
5. 「できる子ども」と「できない子ども」がいる

産業化時代の「学校」とは、、、

1. 学校は専門の管理職者が運営されるもの
2. 知識はバラバラに分節化されている
3. 学校(だけ)が「真理」を語る
4. 学習は原則として個人的なもので、競争することによって向上される

イエナプランの先駆的取組:未来を予測していたペーターセン

このように、高度に産業化された先進社会を見つめながらセンゲが嘆いていることを、実は、ペーター・ペーターセンは1920年代にすでに気づき、センゲがここに挙げているような産業化時代の「学習」や「学校」のあり方に対する代案をすでにいくつも提供していたのです。そして、それが今日、市民社会として最も先駆的な歩みが続けている国の一つ、オランダにおいて、200校以上の学校で、実践されていることに、改めて驚きます。

まず、イエナプラン校は、子どもを欠陥品とみなしません。子どもの頭を、大人が既存の知識を詰め込んでいくための空のバケツとはみなさず、子どもを、芽生えただけの種子とみなします。その種は、強い草の種かもしれないし、美しい花を咲かせるのかもしれないし、大木として育つのもかもしれません。

また、イエナプラン校では、学習は頭だけでやるものではありません。私がよく訪れるイエナプラン校には、廊下の隅に金づちやのこぎりを入れた棚がありますが、子どもたちは、誰から監督されるわけでもなく、自分たちでそれを使い、モノを作っています。距離を置いたさりげない大人の見守りの中で、20年以上もの間、けがや事故が起こったことはない、と言います。

さらに、イエナプラン教育における自立学習とグループ学習は、教師から一斉授業でものを学ぶのではなく、自分に合った学び方、友達との協力で学ぶ方法を身につけさせるものです。学びは、教室の中だけではなく、学校の周辺で、家庭で、通学路でも行われます。学校が、子どもたちの気づきを取り上げ、それを学習意欲へとつないでいるからです。

異年齢学級は、イエナプラン教育の最も大切な特徴ですが、そこで、繰り返し、年少・年中・年長の立場を経験する子どもたちは、ある時は仲間から学び、ある時は仲間を助ける役割を果たすことで、どの子どもも「できる子」「できない子」のレッテルを貼られ続けることはありません。

イエナプラン校の先生たちは、意図して保護者たちの学校参加を促し、また、保護者の意見に耳を傾けることで、学校を管理職者の管理の場にしないようにしています。

先生が教えるのに都合の良い、教科に分かれた授業だけにとどめず、ワールドオリエンテーションという総合的な学習の場を学校のハートに据



Photo:リヒテルズ直子

異年齢で学ぶ子ども達

えることで、子どもたちは、ホンモノの事物に接近し、自分の経験に根差した学習の面白さを実感します。学びは、誰か他の人のためにするものではなく、自分や仲間のため、そして、共に生きることに對して「意味」や「意義」のあるものとして捉えられています。

真理を語るのは、先生だけではなく、何かのきっかけで広く深い知識を得た子どもたちも、真理を語れる人です。生きてきた時間が少し長い先生(グループリーダー)と子どもたちとは、やがて、同じ社会を共に築き支える仲間市民として、サークルを作って平等にかかわり合います。

イエナプラン教育が目指しているのは、「魚(知識)」を直接に子どもたちに与えることではなく、一生の間「魚(知識)」を釣り続けていくことができるように、その方法を伝えることなのです。

イエナプランの特徴とされる4つの基本活動、サークル対話・仕事としての学習・遊び・催しは、教室の椅子に子どもを縛り付けることから得られない、豊かな人間を育むための形式なのです。

追い風ばかりではないけれど、、、

オランダにペーターセンのイエナプラン教育が紹介されたのは1960年代。人々が、産業中心の競争的な社会に決別を告げ、モノの豊かさよりも心の豊かさ、競争よりも共生を求めて、脱産業化社会への一歩を踏み出そうとしていた時代でした。当時オランダでも35基の原発を作り総電力の半分を原発で補うという計画が出されましたが、市民たちは強く「ノー」と声を上げ、実には、70年代には、原発開発政策は死に絶えてしまいました。

それから40年、オランダ・イエナプラン教育40周年の折に、当時の教育文化科学省の大臣マリア・ファン・デル・フーヴェン女史はこういっています。

イエナプラン教育は、まだオランダの学校が気付いていなかったさまざまな率先的な試みを始めていました。それらの多くは、その後のオランダの学校で後になって取り入れられていきました。

彼女の言葉は、決して誇張ではありません。70年代以降のオランダの教育改革に、イエナプラン教育の影響は甚大に認められます。それは、次のようなものの一般的な普及として認められるものです。①サークル対話、②ワールドオリエンテーション、③リビングルームとしての学校や教室、④社会を反映させる生徒集団・特別支援やインクルージョン、⑤市民性(シチズンシップ)教育、⑥教員の現職研修とサポート体制、⑦保護者や地域との協働などです。

さて、オランダでイエナプラン教育が普及した時期とはどんな時代だったのでしょうか。それは、環境汚染と貧富の格差を広げる高度産業社会への疑問が噴出し、米ソの核兵器開発(原発)開発競争の中で世界平和への存続に若者たちが不安を感じていた時代でした。「殺戮の世紀」と呼ばれる二つの大戦の戦場となったヨーロッパでは『ヨーロッパ統合』への動きが始まっていました。保守的な価値観を維持し続けるキリスト教会から若者たちの足が遠のき、それまでタブーとみなされていたことを問い直し議論して、価値観が多様化していきました。社会保障によって安心の生活を獲得した人々は、社会参加・政治参加への時間と余裕を持つようになり、社会の行方に積極的にコミットメントを始めました。今の日本社会の姿にとても似ています。

大震災後の日本は、競争と成長と効率を優先した産業化社会を続けていくのか、それとも、これまでに蓄えた豊かな富を基盤として、それを分かち合い、自然と異文化の人々との共生をもとに、真に心の豊かさのある社会を求めて舵を切り替えるのか、その岐路に立っています。そして、その日本の学校教育もまた、競争と学力優先、非社会的で反社会的な子どもの育ち、自然と格闘して自然を破壊する技術を革新していくのか、それとも、共生の原理に基づき、子どもたちを人間として発達させ、社会に積極的に参加し、自然との融合、豊かな自然を保存するための科学革新に貢献するように育てていくのか、その岐路に立っているといえなくないでしょうか。

社会にも、そして、その社会の未来を決定する学校教育にも、抜本的な改革が必要な時代になっています。そして、それは、世界全体にも言えることなのです。どちらの道をたどるのか、その鍵を握っているのは、政治家や官僚ではなく、私たち一人ひとりの市民です。

改革に追い風ばかりは吹きません。新しい時代の風は、社会の隅っから、多くの人が「そんなこと無理だよ」と考えるようなアイデアから生まれるものです。でも、自分が信じている未来は、人々が明るく安心して幸せに日々を過ごせる社会なのだと思えること、その樂觀こそが明日の社会を切り開いていくのではないのでしょうか。40年前に、そうして取り組んだオランダのイエナプランナーたちの努力の成果は、今、先進国の中で幸福度が第1であるというオランダの子どもたちの笑顔が、それでいいのだ、と証明しています。



シリーズ:

ケース・ポット(Kees Both)先生のイェナプランの出会いと歩み(その3)

オランダでの70年代以降のイェナプラン教育の発展にとってなくてはならない大切な専門家の一人、ケース・ポット先生へのインタビュー記録をお伝えしているシリーズ(その3)です。

Q.またイェナプランコンセプトとの出会いについて話を戻したいのですが、あなたは、Pervaグループに参加したとおっしゃいましたね。それからどうなったのですか？

A.それから私はだんだんとスースを取り巻いていた中核的なグループに関わるようになっていきました。Pervaは教育内容に大変関わっていたプロジェクトでした。私は、その頃もまだ、イェナプランではない学校で働いていました。でも、自分自身の学校でも、少しずついろいろなことをやってみようようになっていました。例えばブロックアワーを導入してみるとか。それができたんですね。なにしろ、私は、2年間同じ子どもたちを指導していましたから。

私はこんな風に子どもたちに言いました。

「私たちに、これだけの時間がある。この時間内に、これだけのことが行われなくてはならないんだ。どうしてかっていうと、次の学年のクラスの先生は、そこからまた先に進んでいくからだ。ただ、それをどうやってやり遂げるかについては、君たちが大半は自分で決めていいんだよ。私たちは、それをできるだけうまくやるように努力しよう。それから、その他にもいろいろなことをやってみよう。その他のことというのは、直接に『やらなければいけない』ということではないけれど、とても興味深いことだからやってみるんだ。僕は、君たちがこういうことをみな努力してやっていく時に助けてあげようと思う。そうして、みんなが素敵に一年にしていこうじゃないか。」

そうして、私は、子どもたちと一緒に、どんなふうに時間を配分していこうかと話し合いました。学校では誰も私がそうするのを禁止する人はいませんでした。だから、ぎりぎりまでできることをやろうとしました。教育監督局のインスペクターの女性が私たちの学校にやってきて、私のクラスにもやってきました。このインスペクターはあとで、校長にこういったんだそうです。「ポット先生のクラスはガヤガヤしているけど、子どもたちは、ものすごく一生懸命勉強している」

とね。普通前においてある「先生の机」は僕のクラスでは後ろに置いてあって、クラスの前には、インストラクション用のテーブルを置いておいた。教室の中は、これまでとは全く違った配置で、グループごとにまとまった机があり、学習コーナーを置いておいた。そうしているうちに、この学校に別れを告げなくてはならない時が来る、、、

私にとって、私たちが、ポール・ピルグラムとかペーター・ティーマンスなどの人たちと一緒にイェナプラン教育財団の理科教育ワークグループを作ったのはとても重要なことでした。Pedomorfose(1973年5月号)の中で、私たちは、イェナプラン・スクールにおける『理科』の出発点を明らかにしました。今それをもう一度読み返してみると、私たちが、どれほどしばしば先端の意識を持って取り組んでいたかがわかって、自分でも改めて驚くんですよ。

当時私たちは、私たちの時間が許す限りでいくつかの学校の指導をしていました。この仕事と私自身の勉強とから、また、私たちが書いていた論文との関係から、私は、その時ごく自然に新しい仕事に就くこととなったのです。それは、小学校の理科教育のカリキュラム開発のプロジェクトで、私は、生物カリキュラム改革委員会に属し、そこで、特に「学校周辺の環境を利用する」という本の執筆に取り組みました。

それが狙っていたのは、理科教育、そしてひいては、ワールドオリエンテーションに自分の学校の周りの環境を使うために、スクリーニング項目リストを作成することでした。偶然というには不思議なんだが、そこでまた私は、1896年にエリ・ヘイマンスといって、ジャック・P・テイセとともに協働した人がすでにそれと同様のことをしていたことを知ったのです。もちろん私たちは、その時、新しいやり方を試みなければならなかったわけですが、考え方そのものは既に存在していたんですね。

イェナプラン財団には、学校で働いている人は理事会には入れないという決まりがありました。なぜなら、そういう人はあまりにも多くの直接的な利害を持つこととなると思われたからです。でも今となって振り返ってみると、なぜそのような決まりがあったのかよく理解できないんです。イェナプランの財団には、学校監督官や研修のトレーナー、指導者など実践に深くかかわっていた人たちがいました。でも、小学校の職員はいなかったんです。

私が学校での勤務をやめた時、私は、ほとんどすぐに財団の理事会に加わることとなりました。当時私は、自由な時間を見つけてはすぐにイェナプランの仕事をしていました。また、財団の理事会員として、学校に、実験的な実践を行うためによく行っていました。あのころの政府は、「伝統的なオールタナティブスクール」つまり、イェナプランとかモンテッソーリとかフリースクールなどが(新しい、幼稚園～小学校一貫の)小学校教育の準備のために何らかの役割を果たすことを望んでいたし、それまでの幼稚園と小学校との間の「協働的な実験」を期待していました。だから、その当時私は、こういう政府の政策の大変身近なところにいたのです。

同時に、Pedomorfoseへの執筆も続けていました。また、財団の理事会の中でもとても多くのことを学びました。

グラベルトン(Grabbelton)

Q.何がきっかけでSLO(国立カリキュラム研究所)で働くこととなったのですか？

A.そうですね、あの頃私は数学委員会とか生物委員会とかとのコンタクトがあり、何がどんなふうに組織されているのかをよく知っていた。それで、ほとんど自動的という感じで、SLOに入ることになったんです。SLOでは、その当時、小学校のための理科教育プロジェクトが始まったばかりで、私たちは新しいプロジェクトグループを結成し、すぐに仕事に取り掛かりました。

Q.その時に私はSLOで初めてあなたと出会ったんですね。SLOではあのころ信じられないくらい革新的な、ワールドオリエンテーション的な雰囲気があったのをよく覚えています。あれは、一つの大きな実験的な場でしたよね。

A.あれは、私にとってもいまだかつてないほど興奮を覚えるようなことでした。ほんとうに。後にも先にも、ああいうグループで仕事をしたことはもうないですね。グループのメンバーは一人ひとりお互いにとっても異なるものを持っていて、お互いを補い合っていたし、お互いに相手を尊重していた。ある人は技術畑に強い人で、私はどっちかというところイデオログだった。つまり、教育的な中身をどうするかということにこだわっていたんだな。その他に、規則を尊重する人もいたし、外交手腕の高い人もいた。お互いにとっても違う才能を持っていたからこそあのプロジェクトを成功させることができたんだと思います。私は、あのグループにいた時ほど、良い意味で、お互いに厳しく関わり合った経験は他にありません。外部の人たちは、私たちが喧嘩をしているものだとよく思っていたらしい。でも、グループとしては、私たちは、大変密な関係を持っていました。SLOの中でも私たちは、一つのブロックを形成していた。私たちは、SLOという組織にとってはしばしば面倒なグループだったと思いますが、反面、私たちは、他の誰もこれまで作り上げたことのないようなものを作ることに成功した、、、。そして、私たちは、学校とも緊密な関係を取りながら仕事をしました。私たちは、とてもしばしば学校に行き、クラスの子どもたち全員といろいろなことを試みた。グループとだったり、個別の子どもとだったり、また教員とだったり。私たちは、子どもたちが、クッキーの種を作ったり、レモネードを作ったりしている時に、彼らの頭の中がどんなふうに働いているのかを見出そうとしていました。教員たちに対しては、私たちは、教育ワークショップやガイダンス、現職研修のようなものを開発しました。そして、そういうものがいかに大切かということは今も信じて疑いません。人々と極めて実践的に関わり、実践の中で何かをしたり、企画したり、振り返ったりするように試みる、そして、経験を通してもう一度始めに戻ってみる、という風に。大人も生徒として取り扱うということなんだ。彼らは彼らなりのレベルで、物事に関わっている。そして、学んだり不思議だと感じたりしている。多分、あなたもSLOでそういうものを見たり、自分でも体験したのではないですか。何しろ、あの教育ワークショップでは面白いことばかりやっていたからね。私の子どもたちは、今もとてもよくそれを覚えていますよ。うちの子どもたちは、私と一緒に学べるのがうれしくて仕方がなかった。水曜日の午後は一緒にいろんなことをやりました。いやあ、本当にあれは、とても特別な年月でした。

Q.あなたは当時すでに、今私たちが理想のチームとして「学習する組織」と呼んでいるようなものを仲間として持っていたということですか？つまり、ぶつかり合えば、そこからお互いに学び合えるということですね？

A.まさにその通り。まさにそんな風にして私は何年間かの間お互いに緊密な関係で仕事をしてきたし、そういう場だから自分自身も本当に成長できるんだ、と思いますね。

Q.私は『引出箱』と「グラベルトン」のことをよく覚えています。

A.グラベルトンねえ。もしもまだ学校にあの雑誌のファイルが残してあるんだしたら、大切にしておくといいですね。あのころというのは、一種の「拡張」の時代だった。何でもやってみることができた。そんなの変だと言われることはなかったし、そういう雰囲気はあの雑誌を見れば分かると思います。その後しばらくするとあのプロジェクトは何となく脇にやけられていった感じだった。多分そうならざるを得ない事情があったのだらうけれど、今になってみると、また、いろんな人があの時代に生まれたものの元をたどろうとしているし、グラベルトンについて探している。インスピレーションを求めているんだね。

Q.当時だってそういうことを開発していくのにそれほど大きな予算がついていたわけではないですよね。今でもあの教材を使っているところがあるんですか？あなた自身も内容面ではあの当時の教材をまだ意識している？経験学習の領域ではそのくらい影響を持っていたのでしょうか？

A.それは本当に強力な影響を持っていると思います。当時すでに私は、理科教育と、それからもっと文化的な内容を持つ学習とはお互いに切り離すことができないということを言いました。

物事はそれなりの場を得ている

Q.でも、経験学習の領域をもとに展開するときに、今でも、この当時の影響を認めることができますか？

A.子どもの経験領域を設定する際、私は、この当時の初等理科教育プロジェクトが設定していた「注目分野」を参考にしました。「環境と地形」という経験領域は、そのままこのプロジェクトでの考えに遡ったものですし、「作ることと使うこと」の中にある『古い技術』とか「めぐる1年」「技術」などにも当時のプロジェクトの考え方が反映しています。「人間の体」という注目分野について、から始め、私たちは、別の経験領域「私の身体」として考えていましたが、後になって、人間学的な考えから、「私の生」という領域を設けることとなりました。

初等理科教育プロジェクトで考案された教材は、経験領域の指導ファイルの中でさらに展開されています。(「出会い形式」としての)学習形式である、戸外探究、発見箱、発見コーナーなどはみなここに含まれています。しかし、いずれにしても私たちは、現在、ワールドオリエンテーションのカリキュラムの中に、イェナプランを位置付けるためにいくつかのことをしていました。当時、私たちは、国立カリキュラム研究所(SLO)もイェナプランワークグループを作っていました。

例えばドレンテ州には理科教育に熱心なイエナプランのグループがあり、私たちはこのグループとも連携しました。SLOではポール・ピルグラムと私がLPCイエナプランのために「発見学習」のビデオテープの中身を制作していました。

私は当時もイエナプラン財団の理事会メンバーでしたが、私自身の仕事の中にもイエナプランナーとしての活動が中心を占めるようになっていたということです。

SLOの新しいワールドオリエンテーションカリキュラムがよかったのは、当時の様々な考え方がそこに場を得ていたということです。もちろん相互作用的な影響もありました。発見箱(これについての初めての記事はペドモルフォーゼで議論されています)や「モノそのものに問かけるといふ原則」などは、初等理科教育の教材の中にも取り入れられました。

いまでも、PABO(初等教員養成大学)の学生たちに、コミュニケーションの経験領域で教育探索ルートを作らせてみたい、また、「作ること・使うこと」の領域で発見箱を考案させてみるといい、こういうことはワールドオリエンテーションを発展させていくためによい課題になるんです。

イエナプランの影響は、私がSLOで最後に関わった出版物「学校の校庭を使って何が出来る?」にも見出すことができます。私は今でも、校庭を使って何か新しいインパクトを与えるのは理想的なことだと考えています。

SLOからCPSへ

Q.あなたはある時期にSLOから他の仕事へと移って行かれました。何がそういう動きに影響を与えたのか、大変興味深く思っているのですが、、

A.エールケ・デ・ヨングが私の前任者でした。私は、エールケと一緒にたくさんの仕事をしてきました。CPS(プロテスタント教育協会)に移る前からです。私たちは1975年に一緒に3週間、イエナプランのためにアメリカに研修に行きました。エールケは1975年から1981年の間イエナプラン働き、特に、教育サポートセンターの指導者のための研修に大変な力を注ぎました。しかし、エールケとスースとは何もかもが違う性格で、時に衝突することも多かったのです。そこで、1981年に、彼は、他の仕事をするために部署を代りました。エールケが移動した後、このポジションは1年間空席でした。それは、一つには、イエナプラン財団とCPSとの間で、新しい国家レベルの研究代表者を選ぶ条件に関して、決定的な意見の違いがあったからなんです。

CPSはプロテスタント系のキリスト教者をその位置につけたかった。他方イエナプラン財団の方は「私たちは私たちが望む人物を任命したい、なぜなら、それは宗教にかかわることではなくイエナプランに関することだから」という意見でした。エールケが去った後、イエナプラン財団は「さあ、また戦うぞ、今こそ戦って勝ち取る場ができたのだから」という感じでした。

でもそういうわけにはいかなかった。

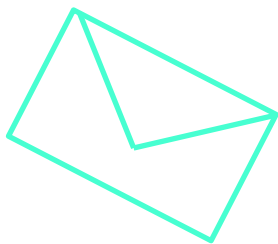
そこで、このポジションの求人広告が来た。私は、ずいぶん考えた末に応募しました。私はSLOで気持ち良く仕事をしていただけけれども、やはりこの仕事に応募すべきだと思った。結局、移ることになり、SLOの同僚たちは、今でも忘れられない、すてきな送別会をしてくれました。

Q.そうしてあなたは、あなたが本当にしたいと思っていた職に就くこととなった、、それは挑戦的なものでしたか?

A.自分でも以前は全く知らなかったイエナプランのために自分が何かができるということ、それが正確にはどういうことなのか、どういう中身なのか、、ええ、もちろんエールケの仕事については知っていましたよ。でも、それがどんな中身のものなのかは、実際に自分がその位置についてみて初めて知りました。

Q.それは大変大きな変化だったのではないですか?

A.ええ、特に、毎日の仕事突然孤独な一人の作業になったことです。以前は、同僚と一緒に仕事をしていましたから。もちろん、とても良い、そして、頻繁なイエナプランナーたちとの関係はあったのですが。



イエナプラン教育やオランダの教育に関するご質問を募集しております。リヒテルズ直子さんにこれが聞きたい!という皆さんの疑問・質問などを下記のメールアドレスまで、お気軽にご連絡ください!
info@japanjenaplan.org

第3回

久保 礼子（日本イエナプラン教育協会福岡支部代表）

今回は、「全体として見えてきたこと」として、オランダから日本に帰ってきて改めて振り返り考察したことを報告させていただきます。

1週間、子どもたちと同じ様にイエナプラン校で過ごさせていただいて、素直にずっと出てきた感想は、「実に自然で心地よい流れの中にいた」ということである。オランダ語は全くわからないのに、全く退屈しなかった。子どもたちの動きや表情を観察させてもらうことだけを通して、とてもたくさんの教育的意図をみることができ、驚かされることばかりだったからである。

まず一つ目。教師の指示や強制がないのに、子どもたちが常にアクティブな状態にあって、次々と様々なことに向かっていっていることである。子どもたちに、ポーッと指示を待つという状態がないのである。サークル対話、学習、遊び、と1日の中で様々な場面が変わっていくが、そこに無駄な時間がない。一つの活動が終わると、一瞬で次の活動に入りそこで集中している。一人ひとり違うことをしていることも多いのに、どうしたらいいかわからず、うろろしているような姿がないのである。今自分は何をすべきか、がきちんとかわっている。一体どのようにしてこんな力が養われていっているのだろうと考えてみた。

基本的に、学校生活において、彼らは**自分で決めて行動**をしている。その日の課題のどれから始めるか、どのやり方でそれをするか、与えられた時間をどう使えば早くやり遂げることができるか等、スケジュール表を朝見た時から、彼らはそんなことを考えているだろう。また、**課題の解決は基本的に自分で**する。教科書を読んだり、人に質問したりしながら自分の課題に取り組んでいる。逆に言えば、自分で行動を起こさない限り、簡単に人は手をさしのべてくれないのである。ある高学年のブロックアワーの時間に、先生が生徒全体に注意をしたことがある。めずらしいことだった。生徒は課題によく取り組んでいたし、分からないことについては静かに先生のところにやってきて質問をし解決してにっこり笑って静かに自分の席に戻っていった。私には、皆とてもよくやっているように見えていたので、何故注意をしたのかを後で先生にたずねた。

先生は、「どうして自分で解決しようとしなくて簡単に教師を頼るのか」と叱ったのだそうだ。私たちゲストがいることでやはり子どもたちの集中力が下がっていて、その結果簡単に先生を頼ってしまう生徒が多くなっていることに気づき、注意を促していたのだ。親切に子どもたちの質問に答えていくことが良い教師の姿だと思いがちな私には、ハッとさせられるできごとだった。このように、ここでは彼らは決して受け身の状態には置かれられないのである。自分で選び、計画を持ち、動く。**主体性、自主性が常に要求される**場面で生活している。こうしたことの積み重ねが自立した子どもたちの姿をつくりだしている。

自主性、主体性という言葉が具現化された子どもたちの姿をみて、自分がこの言葉を、教育の理想的な姿として簡単に手に入るかのように考えていたことを知らされた。すばらしさを説明しその必要性を説いたところで、子どもたちの中に育つものではありえない。「子ども」というものをどうとらえるか、「教育」というものをどうとらえるか、という根本が違っていれば、育ちようがないものだと考えさせられた。

二つ目に考えさせられたことは、子どもたちが、自分で決めるという行動に自信を持っていることである。彼らが自主的に行動できること背景にあるのは、**自分の判断に自信を持っている**ことだと思うのである。自分で決めて行動するためには、訓練も必要だが、これでよし、とする自信が不可欠である。そして、子どもたちがそのような**自信を持ち得る環境**が、イエナプラン校にある。それはまず、サークル対話の働きである。ここで大切にされることは、話し手が心地よく話せることであつた。自分が話すことが良く聞かれることは、周囲に自分が認められているという自信にきつとつながる。また、人が話すことに耳を傾ける訓練は、相手を尊重する姿勢の基本的な態度を養う。自分が認められていると感じ、相手を尊重する気持ちを持つ環境にあるからこそ、自分の判断を良しとし、変に人と比べることをせず、人の邪魔をしない、邪魔もされないという自立した空間が生まれるのではないだろうか。そしてさらに、評価のあり方が大きな役割を持っていると思われる。そこで評価について少し触れたい。（今回の訪問で詳しく正確には把握できていないので、詳しく正確に知りたい方は、リヒテルズさんの著書を調べられることをお勧めします。）

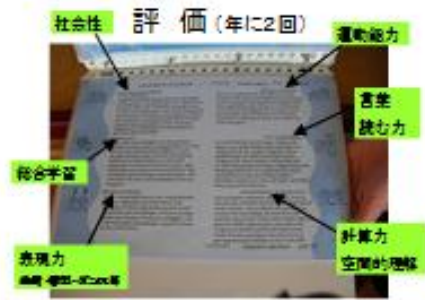
イエナプラン校の評価には3つのスタイルがある。

- ①客観的評価・・・学校が持つためのもの。担任に引き継いでいく。小テストや統一テストの点数などもファイルされている。親の開示要求があれば見せる。

②主観的評価・・・本人や親に渡すもの。日本の通知票の様なので、それぞれの学校が定めた項目ごとに担任が文章表記する。(右写真)

※〈項目〉社会性、綴り・読み、ワールドオリエンテーション、作文、絵画、音楽、スポーツ、数学

③自己評価＝ポートフォリオ



私にとって、とても興味深かったのは③の自己評価だった。これは、自分が誇りに思う作品を自分のファイルにファイルしていく評価である。入学したときから卒業までを分厚い1冊にまとめていくもので、学年が上がるときは大事にそれを抱えて新しい教室に持って行く。何をファイルするかは自分で選ぶ。1週間の活動の中で良くできたと思うものを貯めておき、週の終わりに一つ選んでファイルする。なぜそれを選んだかが自己評価につながる。選んだ作品について、次の項目を自分で評価表に書き込み一緒にファイルする。

①どこを誇りに思うのか(なぜそれを選んだか。)

②満足にできなかったところ(もう少しこうすれば良かった。)

③課題(次はどうしたらいいか。)

④これから他に挑戦してみたいこと

年に3回保護者と子どもと担任との面談があり、ポートフォリオと通知票をもとに会話をする。子どもの話に耳を傾け、教師と親とでアドバイスをして子どもの発達を促す。そのためのポートフォリオであり面談である。

校長先生が私たちを案内してくださり、あるクラスに入って「誰かポートフォリオを見せてくれる？」と声をかけた。一斉に子どもたちが手を挙げる。校長先生が3人を指名。するとその子たちはさっと自分のファイルを持ってきて、自分が誇りに思う点について一生懸命に語り出した。8歳ぐらいだと思うが、その堂々とした様子は驚きだった。作品そのものはまあ普通のもの。ところがその作品一つ一つにストーリーがある。「初めて誰の手も借りずに仕上げた」とか、「Zの文字をうまく書きたいと思って練習してやっとよく書けるようになった」とか、その子どもの中で本当に何かをやり遂げた満足感を持ったものが、ファイルされていたのだ。ここには、とてもシンプルに子どもの発達の軌跡が存在していた。何より子ども自身が、自分が学んだこと、成長したことを自覚していた。自己評価とはこういうことか、と教えられた。彼らは自分の軌跡に誇りを持ち、自分への信頼、自信を深めていくのだ。そしてそのストーリーを保護者がじっくり聞いて共有しているところが素晴らしく思えた。今の日本の大人たちに、そんな心の奥行きがあるだろうか。そんな 大したことのない作品はどうでもよく、テストの点数や他の子どもとの比較が、簡単にその子どもの評価になっていってはいないだろうか。子どもたちは、自分自身の特性や能力を探る時間を全く与えられず、成績や受験といった1本のレールにただ乗せられていってはいないだろうか。思春期になって自分自身が分からなくなるのは必至のこと、だ。

今回の訪問で、私は**子どもが本来持つ力**を見せてもらった気がする。何度も書くが、子どもたちは自分で選び、計画を持ち、自分で解決しようと行動していた。集中して勉強し、集中して遊び、常にアクティブだった。自分の考えたことを、自分の言葉で人に伝え、人の話すことに耳を傾け、相手を認め尊重して一緒に学ぼうとしていた。特別な教師がそんな特別なクラスを作り出していたわけではない。自然な姿でそれがあったのだ。本来子どもが持つ力を上手に発達させていった結果だと思える。サークル対話で話すこと、聞くこと、そして何より相手を尊重することを学び、ブロックアワーでの自主学習で、自分で選び、計画を持ち、自分で解決しようとする自主性が鍛えられる。これらを基礎として、子どもたちの「自立」した「個」としての成長を育てる。その一方で、「協働」の大切さを自然な形で伝え、そのスキルを自然な形で身につけさせていく。協力しましょう、助け合いましょう、みんなであらう等のかけ声はなかったように思えた。それぞれが勝手にしているようにさえ見えた。お互いが邪魔をせず、邪魔をされず、安心して自分の仕事に集中し、助けが欲しいときには誰かに言えば手を貸してもらえ。自然な形で協働を見た気がする。子どもは本来、好奇心がいっぱい、自分でやってみようという挑戦してみたい気持ちがいっぱい、完璧に何かをやり遂げたくて、友達とおしゃべりしたり一緒に遊び回ることが大好きで、パワーあふれる存在なのだ、と改めて認識した。

子どもを大事にするとは何だろう。日本でも家庭が、学校が、国が、子どもたちの教育に大きな関心を持ち、より良くしようと試行錯誤している。子どもを大事に思う気持ちは一緒だ。だが、大事にする方向や仕方がとても違う。日本には画一化されてしまった理想の子どもの姿があり、全員がその姿になるように、大人たちは多くのことを子どもたちに与え続けているのではないだろうか。いい教科書、いいドリル、塾、マニュアル化されたいい授業・・・、これらを、大人が頑張る子どもに与えればいい結果が出るのか？与え続けることは、かえって子どもの好奇心や自主性を奪ってしまうのではないのか？本当に与えるべきは？？

私は結局、こんな問いの嵐で頭や気持ちがぐちゃぐちゃで日本に帰ってきました。そして今わたしは、学校が与えるべきものは、子どもが「自立」と「協働」を体験し学べる機会と場所なのではないかと考えています。そんな場所だったなあと、イエナプラン校の実践を振り返り、あらためてペーターセンの教育哲学に感銘です！！

次回最終回は、ミュンヘンで参加したイエナプラン指導者のための講習会の報告です。

『日本イエナプラン教育協会設立1周年記念講演会・ワークショップ』ご報告

11月20日（日）、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、日本イエナプラン教育協会1周年記念講演会・ワークショップを無事開催させて頂きました。ご参加頂いた皆さま、どうもありがとうございました。

前半の1周年記念講演会では、協会の1年間の活動報告をさせて頂いた後、中学校教諭小林氏と会田氏に、オランダ視察報告と日本の現場での実践報告をして頂きました。また、日本イエナプラン教育協会の会長であるリヒテルズ直子氏の講演も行われました。（本ニュースレター1ページ～3ページの記事は、この時の講演の内容をもとに、リヒテルズ直子氏に書き起こして頂いたものです。）

後半はワールドオリエンテーションをテーマにしたワークショップが行われました。今回のニュースレターでは、このワークショップにご参加頂き、現場で様々な実践をされているお二人のコラムも掲載させて頂いております。

これからもイエナプラン教育をはじめとした様々な『多様な教育』に興味関心を持たれている方々のネットワークを広げていけるよう、活動していきますのでどうぞよろしくお願い致します。



Photo:中川綾



Photo:中川綾

コラム I

リヒテルズ直子さんの講演・ワークショップを体験して

埼玉県 小学校教員 池谷裕次

本物に触れるということ。

真赤なリンゴが1つ。

「あなたはこのリンゴを教材に、どんなことができるでしょう？」

リヒテルズ直子さんが問いかけた。近くの人と4人組グループになった私たちは、皮の剥き方、産地調べ、重さの学習、ジュース作り、キャッチボール、etc...

たくさんのアイデアをひねり出し、それぞれのグループで30~40項目のリストを作成した。

次に配られたのは、紙で本物のように作られた、造形物の『リンゴ』だ。

そしてこう問われる。

「では？そのリストの中で、この『リンゴ』でできるものはいくつありますか？」

ジュースは作れない。産地もないだろう。消されていくアイデアたち。リストの5分の1ほどは消えてしまった。その次に配られたのはカラープリントで描かれた写真の『リンゴ』。そして同じく問われる。

「では？そのリストの中で、この『リンゴ』でできるものはいくつありますか？」リストの多くのアイデアが削られた。そして最後はA4の紙に黒い文字で書かれただけの『リンゴ』だった。リストのアイデアのほとんどは消えてしまった。

このワークで2つのことに気付かされた。如何に「本物」が多くの情報を持っているのかということ。「本物」は五感に働きかけ、単なる知識以上の体験的な学びを与えてくれる。そして如何に普段の授業で、子どもたちに「本物」に触れさせていないかということ。普段の授業では、教材準備をしっかりとしなければ、教科書に載っている写真、あるいは文字だけで指導していることになる。これでは五感が刺激されず生きた学びとならない。

「本物」に触れる体験がもう一つ。リヒテルズ直子さんが用意した、ボール紙や広告用紙などの紙。

「この紙について知りたいことはありますか？「紙」たちに質問したいことを考えましょう。」

どこからきたの？何に弱い？燃やすとどうなるの？さわり心地は？...40個ほどの「紙」への質問ができた。「本物」が目の前にあるからこそ、五感が刺激され、これだけの質問を思い付くことができた。

このような、できるかぎり「本物」に近い教材に対する子どもの興味や体験を、周りの世界とつなげて学習していくという考え方が、イエナプランの一つの重要な側面なのだ実感した。

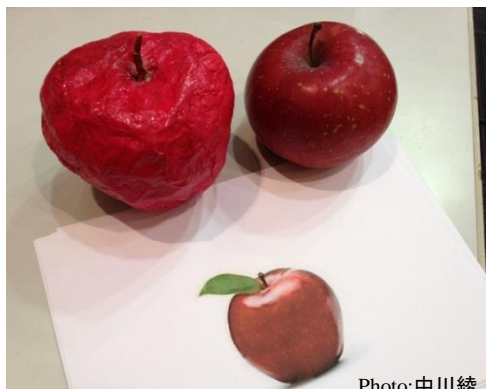


Photo:中川綾

ワールドオリエンテーション

そうした自分の経験と世界をつなぐ活動であり、イエナプランの心臓ともいえる活動が、ワールドオリエンテーションである。ワールドオリエンテーションは、学習を自然、社会、文化にまたがる7つの経験領域(巡る一年、環境と地形、作る 使う、技術、コミュニケーション、共に生きる、私の一生)を総合的に学ぶものである。また、教科教育で得た知識が探求を深め、その経験が、また教科学習を高めていく。そんなワールドオリエンテーションの教材作りはとてもクリエイティブだった。模造紙の真ん中には「紙」の文字。それをとり囲むように7つの経験領域の言葉。私たちは「紙」から連想される、それぞれの経験領域を満たす活動を考えていった。教科教育では、教えなければならないゴールがあり、それを教えるためにカリキュラムを組むが、ワールドオリエンテーションのそれはゴールが決まっていなく、興味関心が広がる限り学び続けることができる、とてもわくわくドキドキさせてくれる学習であった。このワールドオリエンテーションの在り方は、世界を見ることで、生きた力を手に入れる、まさに学習の理想だと言える。日本の総合的な学習の時間は、イエナプランでのワールドオリエンテーションに位置づけられるが、まだ「本物」から学び、子ども自らが世界を学ぶものになっているとは言い難い。しかし、イエナプランの考え方から学ぶことで、子どもが生き生きと活動し、生きた学習ができるような総合的な学習の時間を計画することができるだろう。

イエナの子どもたちは、それぞれの個性に合わせて生まれ、自立的に学ぶ術を学び、仲間と協調して仕事をする力をつけて育っている。そのどれもが、今の日本の教育に必要なものだと、私は考える。ドイツで生まれたイエナプラン教育が、オランダでオランダ・イエナプラン教育として発展してきたように、私は、志をともしにする仲間たちと日本の教育環境に合った、日本・イエナプラン教育をつくっていきたい。

コラムⅡ

大学生が挑む総合学習のカリキュラムづくり

信州大学教育学部 伏木 久始

Ⅰ はじめに

私は教職志望の大学生を相手に総合学習のカリキュラムづくりを体験するワークショップを毎年開いています。信州大学教育学部の「教育方法学・総合学習概論」という専門科目に集まる30名程度の学生と、90分×全15回の授業を一緒に創ること自体がねらいの1つですが、以前はそのうち3回分ほどの授業枠を割いて、フィンランドやデンマークの学校で取り組まれるタイプの総合学習をヒントに、グループワークによる総合学習の単元づくりを課題にしていました。そんな時、リヒテルズさんの『オランダの教育』と『オランダの個別教育はなぜ成功したのか』に出会ったのです。すぐにリヒテルズさんに連絡をして取材のお願いをしたら、ご本人のナビ&通訳付きのイエナプラン校参観(2007年9月)が実現しました。その翌年度から、その授業ではイエナプランで大事にしているサークル対話やワールドオリエンテーションの発想を取り入れるようになりました。以下、今年度の事例を中心に、実際のカリキュラムづくりワークショップの授業概要をご紹介します。

Ⅱ 「教育方法学・総合学習概論」(半期2単位)の授業の概要

【15回の授業の概要(A→Hの順)】	【カリキュラムづくりワークショップ】
* 以下A～Dの授業では、5人グループを編成して 講義とディスカッションを通して内容を学び合う。	* 2011年度もほぼ例年通りのパターンで進め、このワークショップの授業は計3コマ。時間不足の班は課外に集まってやっています。
A)戦前から総合学習を実践してきた伝統校の教育観やその系譜を解説する。	1.クローズドテーマからのカリキュラム開発 (90分×0.5コマ)
B)「総合的な学習の時間」のねらいや意義を解説し、学校現場で取り組まれている実態や実践上の課題を理解させる。	(1)素材を学習材として考えるワーク ※今回はリヒテルズさんのリンゴのワーク(2011年11月20日)を「お蕎麦」に換えてマネしてみました。
C)今日の学校現場で総合的な学習のユニークな実践をしている先生の事例を紹介する。	(2)テーマの構造化と学習項目の抽出
D)総合的な学習のカリキュラム理論とカリキュラム編成上の基礎知識を提供する。	(3)学習内容の配列と展開の構想
* 以下E～Hの授業では、前半のグループをシャッフルして新しい5人グループを編成しワークを行う。	2.オープンテーマからのカリキュラム開発 (90分×2.5コマ)
E)諸外国の総合学習の事例を紹介する。	(1) 各自の興味・関心を知り合う活動
F)【総合学習のカリキュラムづくりワークショップ】	(2)テーマの設定
G) <発表会>構想したカリキュラムをパワーポイント等でプレゼンテーションする。	(3)テーマの構造化と学習項目の抽出
H)ふり返りのサークル対話を行う。	(4)学習内容の配列と展開の構想
	(5)カリキュラム案をパワーポイントで整理

1. 指定テーマ(クローズドテーマ)からのカリキュラム開発ワーク

(1)素材を「学習材」として考えるウォーミングアップ

※(昨秋のリヒテルズさんのワークショップでは「リンゴ」の実物
→リンゴのレプリカ→文字での「リンゴ」の3つで「できること」を
考えるワークを経験しました。その「お蕎麦」バージョンです。)

- ①生協食堂で茹でたばかりのお蕎麦を小皿に分けて配付
…「これからどんな学習が可能か？」→リストアップする
- ②お蕎麦が写っている写真を配付
…「先ほどのリストからできなくなるものは？」
- ③「お蕎麦」と印字した紙切れを配付
…「さらに先ほどのリストからできなくなるものは？」

(2)テーマの構造化と学習項目の抽出

(「お蕎麦」から発想する学習活動を総合的に構造化する)

- ①模造紙を十字に4分割し、「歴史」「自然・地理」「観光」「情報」という4象限を設定し、中央には4項目を統合する楕円を描かせ、キーワード「人」を設定。このフォームの中で「お蕎麦」から連想できる学習活動を可能な限り書き出す。
- ②ウェビングを取り入れたり付箋紙を活用したりして、学習項目を分類整理し、必要に応じてサブカテゴリーを記入する。

(3)学習内容の配列と展開の構想

- ①リストアップした項目の中で、追究したい内容を選択し、それに関わる具体的な「学習活動」のアイデアを話し合って図中に書き込む作業を指示する。
- ②選んだ学習項目をどういう順番(展開)で取り組むかを決めてマジックで番号を上書きする。
- ③活動のエンディングのイメージを話し合う。



アイデアの共有

2. 追究テーマづくり(オープンテーマ)からの総合学習のカリキュラム開発ワーク



各自のこだわりをシェアする

(1)各自の興味・関心を知り合う活動

- ①グループ席の机の上に模造紙を敷き、自分の目の前の位置に「いま気になっていること…」を書き込むための楕円枠を設定する。そこにメンバーそれぞれの興味・関心をリストアップする。
- ②グループごとに自分が書いた項目に関して仲間から共感を得られるような説明をそれぞれが行い、お互いの問題意識を理解し合う。

(2)テーマの設定

- ①テーマ候補を絞り、最終的にグループテーマをどのように決めるかを話し合う。
 - ②メンバー全員が追究意識を共有できるテーマを設定する。
- ※以下、(3)～(4)はクローズドテーマでの作業と流れは同様です。

(3)テーマの構造化と学習項目の抽出

(4)学習内容の配列と展開の構想

(5)カリキュラム案をパワーポイントで整理

構想したカリキュラムはパワーポイント等のソフトにまとめ、グループごとの発表会(今年度は1月24)にてプレゼンテーションする。



Ⅲ この授業を9年間続けてきて思うこと

本稿では、大学生対象のカリキュラムづくりの授業を紹介しましたが、決してワークショップのハウツーとして話題提供するものではありません。イェナプランも教育方法の形式だけをコピーして実践してもあまり意味がないように、カリキュラム開発においてもその奥に埋め込まれている授業者の教育観がきわめて重要です。「何のために学ぶのか」「子どもは何をどう学んでいるのか」を問い直すことが必要です。学校のテストで問われるだけの“閉じた知識”を短期的に記憶する学習訓練から得た学力はすぐに剥落するという実態を直視し、「生きるための知識とは何か」、「未来型の学力とは…」と議論し合う仲間を増やしていくことが私のねらいです。

しかし、この授業を取りに来る学生の実際の動機は、卒業単位や教職免許の必要性からであり、「総合的な学習の時間」の必要性を感じないまま教育学部に入学し、専門教科の勉強に励んでいる学生がほとんどです。授業開始当初の学生の反応としては、外国の実践事例を紹介するたびに「羨ましい」と感じつつ、歴史や文化が違うからマネをしてもダメと線を引きたがり、国内の豊かな総合学習の実践を映像付きで紹介すると、「学校の伝統や地域の教育力が違う」と特殊扱いする傾向があります。「カリキュラムづくり」などというと、「教師の負担が大変！」などという声まで出てきます。

それでも、グループワークやカリキュラムづくりのワークショップを通して、“自分たちで考える”ことの大切さ、“カリキュラムをデザインすることの面白さ”を実感した学生は、「現場に出たら自分なりの総合学習に挑戦してみます！」と最後の授業で宣言する頼もしい開拓者になります。多くの進学系高校での「総合的な学習の時間」がそのねらいとはほど遠い受験対策に特化している実態に対して、大学の教職課程の授業ではその歪みを解消させないと、現職の先生方の中にも多い受験対策偏重の教育観を再生産することになります。「教えないとわからない」と考える人よりも、「教えてしまったら自分で学ぶ力を奪ってしまう」という発想をもてる人が増えていくように、私はこれからも大学の授業や教員研修会やPTA講座の中で、ささやかな挑戦をしていこうと思います。

今年も、最終回のふり返りのサークル対話は、善光寺の宿坊で学生向けに特別に用意していただく精進料理を食べながら、食文化と環境と健康とのつながりを楽しく学ぶこともセットにした「語り合う場」となります。(2012.1.17)



■お知らせ■

ニュースレターも13号を迎えました。みなさまの励ましに本当に感謝しております。これからも、『かけがえのないユニークな』私たち一人一人が成長していける教育環境をつくっていきましょう！どうぞよろしく願いいたします。

※重要なお知らせがございますのでご確認ください。

- ・より多くの方にイエナプラン教育を知っていただくため、今年度より年会費が3000円になりました。既にご入会の方は、4年会員とさせていただきますのでご了承ください。(2014年10月まで会費はかかりません) ご不明な点は事務局までお問合せ下さい。 info@japanjenaplan.org
- ・ニュースレターが季刊誌になりました。(1・4・7・10月)
- ・第2回オランダ研修が開催されることになりました。本場のイエナプランを学ぶことができ、現地の学校を視察できます。詳しくは協会HPをご覧ください。
<http://news.japanjenaplan.org/?eid=7>
- ・協会HPから過去のニュースレターを閲覧できます。1年経過したニュースレターを毎月HPに公開させていただきますのでぜひご覧ください！
<http://news.japanjenaplan.org/?eid=9>

★ニュースレターへのご意見ご感想をお待ちしております。

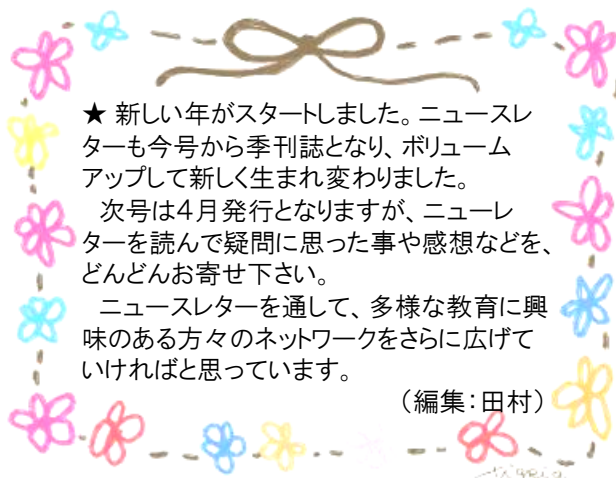
より良いニュースレターの制作のためにも、みなさまのご意見ご感想をお聞かせください。

info@japanjenaplan.org

みなさんのご意見・ご感想を心よりお待ちしております。

★各支部のご案内

- 東京支部 info@japanjenaplan.org
- 千葉支部 chiba@japanjenaplan.org
- 埼玉支部 saitama@japanjenaplan.org
- 京都支部 kyoto@japanjenaplan.org
- 福岡支部 fukuoka@japanjenaplan.org



★新しい年がスタートしました。ニュースレターも今号から季刊誌となり、ボリュームアップして新しく生まれ変わりました。

次号は4月発行となりますが、ニュースレターを読んで疑問に思った事や感想などを、どんどんお寄せ下さい。

ニュースレターを通して、多様な教育に興味のある方々のネットワークをさらに広げていければと思っています。

(編集:田村)